

一九七七年以前出土の木簡(二七)

奈良・平城宮跡

へいじょうきゅう

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 第七八次調査南区 一九七三年(昭48)四月～七月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 坪井清足
- 5 遺跡の種類 宮殿跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
平城宮には中央区と東区の二つの大極殿・朝堂空間があり、複雑な変遷を辿ったことが知られている。これに対し内裏は、称徳天皇の西宮の時期を除いて継続して東区北方に営まれ、六時期の変遷が明らかにされている。しかし、女帝や太上天皇の存在によって、その様相が平安宮の内裏と大きく異なるだけでなく、奈良時代を通じて、そして大きな変遷を遂げることとなった。平安宮の内裏の原形が成立す

るのは、初めて内裏に後宮が設けられたV期の光仁朝以降と考えられている。

さて、内裏地域の発掘調査では、調査面積の割に木製品の出土が少なく、計二四点を数えるに過ぎない。そのうち今回報告する木簡を含む二二点が井戸SE七九〇〇枠内の遺物である。

井戸SE七九〇〇は、内裏東端中央部に位置する内裏内唯一の井戸で、上下二段の井戸枠をもつ。下段の円形井戸枠は、スギの一本削り抜きで、外径約一・六五m内径約一・三m厚さ一五～二〇cm。

上段の方形横板組の井戸枠は、南・東・西の三面に遺存し、長さ約一・六～一・七m高さ約二〇cm、厚さは現状で三～四cmある。井戸枠の据付掘形は一辺約三・五～三・八mの隅丸方形で、深さは約二・七mあり、底に礫を敷き詰め井戸枠を据えている。井戸枠は奈良時代を通じて改修の痕跡はないが、内裏の区画施設を掘立柱塀から築地回廊に改修するのに伴って周辺の盛土造成が行なわれ、外周に石敷きの洗場が設けられる。

SE七九〇〇はよく清掃が行き届き、出土遺物は少ない。木製品は、掘形から出土した曲物一点以外はいずれも井戸枠内のもので、

木簡以外には、齋串、木錘、櫛、曲物の底板や蓋板、曲物の側板を二次利用した朱の付着痕跡のある用途不詳板材がある。金属製品には銅鑄（丸軋表金具）、和同開珎・神功開宝・隆平永宝各一点など、土器は内裏廃絶後の時期のものが少量出土している。瓦には隅軒平瓦や隅平瓦があるほか、井戸の周辺からは「司」の刻印のある瓦が四点出土している。

8 木簡の积文・内容

(1) 「(墨画) 白物桶惣」

(墨画) 白物桶惣
物



71×(25)×4 081

上下両端とも円弧状に削り出されており、曲物底板の断片の可能性がある。その場合の復原径は七・一cmとなるが、上端の削り方が粗く、断定はできない。白物桶は不詳。「奈尔波」は難波津の歌の一節の可能性がある。表面上部には墨画と思われるものがみられるが、一部欠失しており、何を描いたものかは不詳である。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XIII』（一九九一年）

(渡辺晃宏)

